

TUAD vision 2024

芸工大が考える、次のミライ。

- 03 ごあいさつ
- 05 東北芸術工科大学のミッション・ビジョン・2024年の将来像

- 06 「東北芸術工科大学」というブランドの確立
- 07 実社会で「活躍できる人材」を輩出する大学
- 08 教育の質で選ばれる大学
- 09 チェンジメーカーを育成する大学
- 10 新しい美大生像を社会に問う大学
- 11 新しい「地方」をつくる大学へ「クリエイティブ・ローカル」
- 12 「地域の持続可能性」に貢献する大学①
- 13 「地域の持続可能性」に貢献する大学②
- 14 学修環境基盤整備と経営基盤の強化
- 15 地域が育てるこども園「こども芸術大学」

- 16 「vision 2024」の推進方針

TUAD vision 2024

私たちはどこから来て、どこへ行こうとしているのか。

私は個人でも組織でも10年単位が、何かを成し遂げる、また何者になるかの基準のように思っています。次の時代の東北芸術工科大学を考えると、「vision 2024」の前半に迎える2021年が東日本大震災から10年の節目であることが大きな意味を持つように思えます。震災の後に、芸術は大学は東北の地で何をなし得たのか、今が自らの足跡を謙虚に振り返るタイミングでしょう。

その上で、「vision 2024」は開学30年を迎える大学の未来に向けた宣言であります。先の読めない困難な時代だからこそ、学生、教員、職員が自らの想像力と創造力の二つの力を基に、明日の大学を検討してきました。先端的研究を実行し、地域との共存を実現させ、地域になくてはならない大学、それが日本社会の中でモデルとなる大学を目指します。卒業生、保護者、支援者の皆様と共にこのビジョンを共有し、教育の充実や法人経営の改革を図ることはもとより、芸術立国の理念の下に、新たな大学のブランドの確立へ一歩を踏み出すことを誓うものであります。

学校法人東北芸術工科大学 理事長 根岸吉太郎

開学から30年、我々は他に負けない「芸術大学」を、ここ東北・山形の地につくるために、地域の皆様や歴代の素晴らしい学生、教職員に恵まれ、30年という短い期間にも関わらず、全国的にも高く評価をいただける芸術大学に成長することができました。しかし、我々は、単に良質な芸術大学になることを目指していたわけではありません。

東北芸術工科大学は今、満を持して「芸術大学」の「次」に進む時を迎えています。

我々にとっての成長の30年は、世界にとっての激動の30年でもありました。世界の姿はすっかり変わり、大自然による地球環境は急激に変化し、テクノロジーによる人間社会の構造は完全に刷新され、そして、それら全ての変化がますます速まっています。

そうした中、いつの間にか私たちが開学より掲げてきた「芸術立国」の理念そのままに、ART&DESIGNが、人類全体を平和と希望に導く、最も重要なファクターになってきています。芸術文化は新しい時代の心の医療に取って代わりつつあり、デザインはすでに経済活動や社会構造の軸となる考え方にまで広がっています。

この「vision 2024」は、これからの30年を見据え、東北芸術工科大学の「次」の仕事のために策定されました。「芸術大学」というスタイルに逃げず、「大学」という制限に屈せず、むしろ大きく枠を飛び超えて、ART&DESIGNの運動体となること目指すものです。

東北芸術工科大学 学長 中山ダイスケ

「vision 2024」について

この度、学校法人東北芸術工科大学（以下「芸工大」）は、「vision 2024」を策定し、さまざまな改革に取り組みます。

私たちは、人口が長期に渡り減少していくという、歴史的にも極めて特異な時代を生きています。

また、あらゆるモノがデジタルデータとしてコンピュータで処理可能となる「デジタルイゼーション」が高度に発展した社会に身を置いています。未来社会は、少なくとも現在の延長線上にはないでしょう。

AIを軸にして進む第4次産業革命では、私たちの暮らしはもちろんのこと、大学で育成が求められる人材像、さらには教育の手法までも変化していくことになるでしょう。

そうした時代だからこそ、芸工大は常に建学の理念に立ち返り、「芸術的創造と良心による科学技術の運用により、新しい世界観の確立を目指す」“方法”をつくっていくため、全学一致で行動していきます。

そして、その行動指針が、このビジョンになります。

東北芸術工科大学の ミッション・ビジョン・2024年の将来像

建学の理念 ミッション	芸術的創造と良心による科学技術の運用により、新しい世界観の確立を目指す。
------------------------	--------------------------------------



ビジョン	不断の改革と差別化を追求する営みを続け、大学の本質（教育内容、取り組み）が十分に社会に訴求できた結果、地域になくてはならない独自の世界観を持つ全国区の大学となる。
-------------	---



2024年 学校法人東北芸術工科大学の将来像		
<p>教育について</p> <p>オンライン教育で世界の大学の授業が受けられる時代にあって、山形の地に集まって学ぶ確固たる理由、ここに来なければ体験できないといわれる教育プログラムを確立し、複雑で変化の激しい今日の社会環境において「活躍できる人材」を輩出していると社会が評価する*大学となっています。</p>	<p>地域貢献について</p> <p>地域の課題解決の当事者となり、教育・研究を通して地域の持続可能性を高め、地域にとって不可欠な存在であると、社会が評価する*大学となっています。</p>	<p>法人経営について</p> <p>大学の教育、活動を戦略的にブランディングし、唯一無二のポジションを獲得することで、芸術大学に関する価値観を壊し、入学者の裾野を広げています。新人事制度(育成・評価・処遇)を整備し、教職員個々人の成長が大学の成長につながる組織づくりを進めます。財政面では、不断の改革を支える財政投資と規律ある財政運営を両立させながら、財政基盤が強化されています。</p>

*「社会が評価している」ことがビジョン達成の尺度になります。

「東北芸術工科大学」という ブランドの確立

「東北芸術工科大学ブランド」とは、換言すれば「芸工大らしさ」です。ステークホルダーが感じる品質（知覚品質）であり、「社会における芸工大の位置付け」です。

ブランドは、自分たちでコントロールしないことには育ちません。大学の活動のどこを見ても共通の価値観を感じさせることが、ブランドを育てます。ブランディングの目的は、人々の意識の中で限定的に捉えられてきた「芸大」のイメージを払拭し、芸工大という一つの強いカラーで社会に認知されている状態になることです。

立地やネームバリューなどで安易に他大学と比較されるのではなく、独自の価値、魅力で人を惹きつけていきます。

そのために必要なのが個性、つまり「違い」です。その違いを見つけて磨き、伝えるべきことを整理して、正しく伝える一連の作業が、ブランディングです。

これらの活動で、どことも似ていない、突き抜けたクリエイティブを生み続けることで、芸工大ブランドが確立される



「実社会で活躍できる人材を輩出する」大学
「教育の質で選ばれる」大学
「チェンジメーカーを育成する」大学
「新しい美大生像を社会に問う」大学
「地域の持続可能性に貢献する」大学



実社会で「活躍できる人材」を輩出する大学

芸工大の教育目標は、「人と自然を思いやる想像力と社会を変革する創造力を身に付け、困難な課題を克服しようとする強い意志とともに、芸術の力を社会のために用いることのできる人材の育成」です。その成果指標を「実社会から“求められる人材”を輩出したのか」と定め、進路決定率の数値目標を掲げました。

そして、教職員の結束した行動の結果、短期間で目標を達成し、希望者が集中し競争が熾烈な企業等に多くの人材を送り出しています。

しかし、「求められる人材」とは、人材市場で需要のある人、職に就ける人材のことで、求められる人材が、職場や仕事において「活躍できる人材」となれる保証がないのが、実社会の現実です。複雑で変化の激しい今日の社会環境において「活躍できる人材」とは、「全体を直感的に捉え、課題を発見し（アート之力）、創造的に解決できる（デザイン之力）人材」だと考えます。そして「活躍できる人材」に求められる能力は、芸工大がディプロマポリシー（DP）で示した「身に付けるべき能力」です。

よって、芸工大が今後、目指すべきことは、学生がDPに基づいた身に付けるべき能力を身に付け、自らの伸長を実感できる仕組み、人材を育成する側と人材を受け入れる側で議論する仕組みの構築と、これら仕組みを改善・向上させる全学的な教学マネジメント力の向上です。

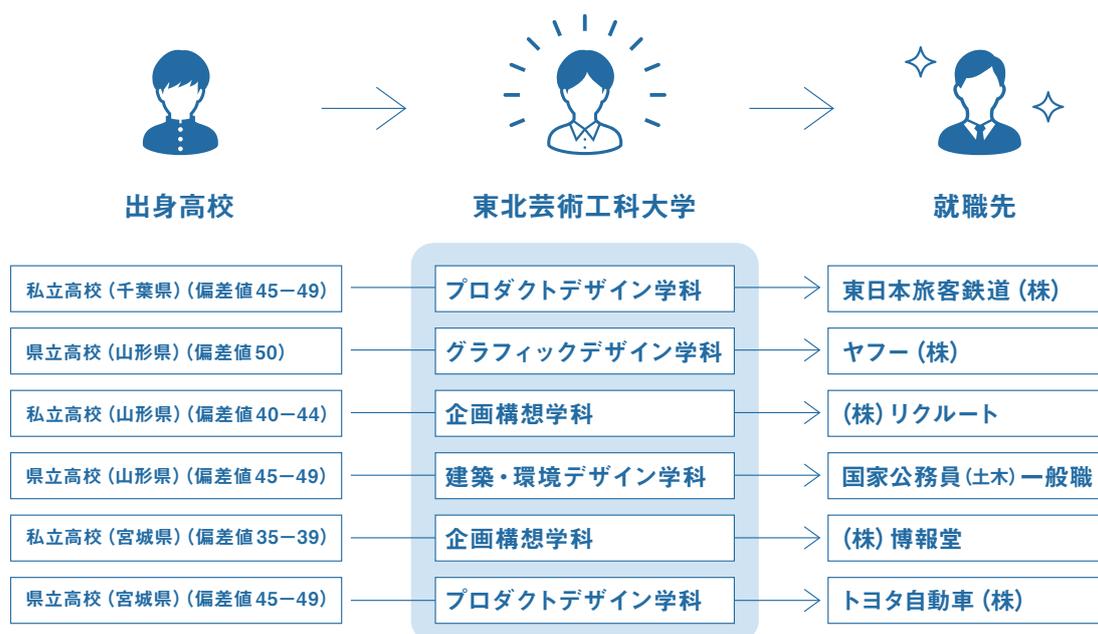
そして、芸工大のDPが達成されている状態を可視化し、情報公開していくことが、芸工大の「教育の質の保証」となります。



教育の質で選ばれる大学

芸工大では、教育成果を表す指標を学生の「進路決定率」と定め、学力を基礎に人格を磨き、入学時偏差値よりも卒業時偏差値を上げてきました。*
 芸工大で学ぶことで、その人の潜在力が拡張され、飛躍的に成長する。どんな時代の変化においてもこれを維持するため、不断の教育改革を続けていきます。

芸工大の学生募集戦略は、「質の高い教育の実践」→「出口の確実さと高い就労の実現」→「芸工大の学びが将来、社会で役に立つか否かの評価」で、本学の知覚品質を各ステークホルダーに浸透させていくというものです。
 人口減で需要が縮小する状況に対して、大学の本質である「教育の質の違い」でブランド価値を高め、選ばれる大学になります。



vision 2024

進路決定率90%以上の維持と、教育の質保証システムの確立
 及び公開が常態化されている

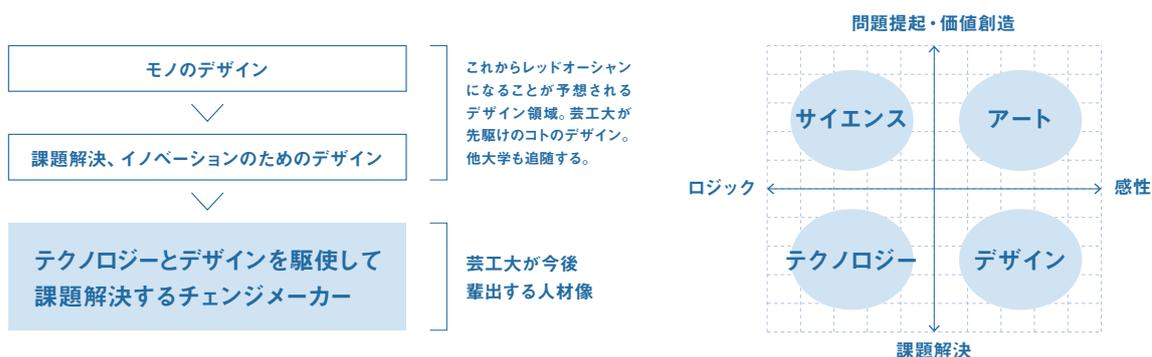
チェンジメーカーを育成する大学

芸工大は四半世紀前、日本の大学で初めて「デザイン」を冠した学部をつくりました。その後も、人と人の関係や状況づくり(コト)をデザインする国内初の学科を創設するなど、常にデザイン教育の一步先を走ってきました。

ますます多様で複雑化する社会課題に対応するため、特定の人々に向けて有限のモノを制作する「従来型のデザイナー」(グラフィックデザイナー、工業デザイナーなど)育成の強化は継続しつつ、AIやデータサイエンスの力を用いて何百万もの人々の暮らしに影響を与える製品を制作する、あるいは、社会問題を発見し解決できるデザイナーの育成に着手します。

芸工大はこれまで、感性で問題提起を行い、新しい価値を創造するアート、感性で課題解決を図るデザインを学問として磨き上げて成長してきました。これからは、これに加え、ロジックで課題解決を図るテクノロジー分野の教育を強化し、感性、ロジック両面から課題解決、価値創造ができる「チェンジメーカー[※]」を輩出します。さらに、芸工大の個性である、学科の枠を超えて行われている演習を、デザイン工学部全体で強化し、本学の特長とします。例えば、複数の学科合同によるモノやサービスの開発型演習では、顧客の潜在ニーズの発見、デザイン、プロモーションまで、一貫貫通の課題解決プロセスを学生は体感することになります。

※チェンジメーカー：未来を創る当事者。社会変革(Social change)の担い手として、社会の課題を、事業により解決する人。



vision 2024

テクノロジーとデザインを駆使するチェンジメーカー育成プログラムを擁する日本で唯一無二の「芸術工科」大学となっている

新しい美大生像を社会に問う大学

芸術学部定員の半分以上を占めるファインアート系（美術科）の学生のキャリア意識は、10年前とは明らかに変化しました。

学生は早期に進路を決め、半年余り卒業作品制作に没頭し、大作を完成させます。これが現在の主流派です。ファインアート系学生の就職内定率は90%を超えるようになりました。とりわけ教員採用試験（美術）の実績は高く、難関と言われる“現役”による試験合格率は、国公立大学の教育学部を凌駕しています*。

ファインアート系に進学する高校生の潜在的な欲求は、「もっと絵がうまくなりたい。だから大学で描き続けたい」だと想像します。芸工大は、教育力を研鑽し、彼らの声に応えていきます。そして、4年間で成長した彼らは、希望の仕事に就き、経済的自立を担保にアーティストも続ける「パラレルキャリア（キャリアの複線化）」を自ら実現しています。これが、芸工大による「新しい美大生像」です。もちろん、ファインアート系の学生全てに画一的な進路を指し示すわけではありません。卓越した才能・将来性を認める学生に対して、作品のオリジナリティとコミュニケーションの質を高める教育を行い、“アーティスト輩出の「確率」を高める機会”を提供します。

独自のシステムとして、選抜によりアーティスト・インキュベーションに学生が所属し、特別な教育を受け、さらに、台頭著しいアジア・アートマーケットでデビューするルートを確立します。

これらは一見、二つの異なるタイプのアーティスト育成のようですが、それは進路の違いであり、芸工大のファインアート教育の目的は、最先端のアートシーンへの理解を身に付けた上で、かつ地域課題への取り組みもこなせる「複眼的なアーティストの育成」です。そこで生まれるアート作品は、この場所にとっての必然性の中から生まれたものですが、首都圏や海外のシーンからは、こちらの意図しない価値や新しさを投影されることもあるでしょう。

※2018年は、12名が受験し、7名が現役で採用試験合格。2019年は、15名受験し、現役12名の合格

vision 2024

- ・創造的な人生を送るための的確なキャリア支援が行き届いている
- ・芸工大は、継続的にマーケットで活躍するアーティストを輩出している

新しい「地方」をつくる大学へ 「クリエイティブ・ローカル」

「CREATIVE LOCAL」は、「仙山生活圏」を考える本学主催のシンポジウムで、仙台・山形両市長と共に登壇した建築・環境デザイン学科の馬場正尊教授が提唱しました。

馬場は「クリエイティブ・ローカル」に二つの意味を持たせました。一つは、「新しいローカル／地方をつくろう」という呼びかけです。

もう一つは「ローカル」という言葉の意味を再定義して、「新たな価値観と手法で次の時代の風景をつくる」というものです。

「人口が減り、既存のシステムに隙ができるからこそ、新しい発想や活動が入り込み、これまでなかった価値を生み出す余地ができる。だから突き抜けたクリエイティブはローカルにこそ生まれる」——という考えです。

芸工大は、地方都市・山形で、前例主義に走らず、どことも似ていない、独自のクリエイティブを生み続け、これまでなかった価値を地方から発信することで、日本の社会のモデルとなる地方を創造していきます。



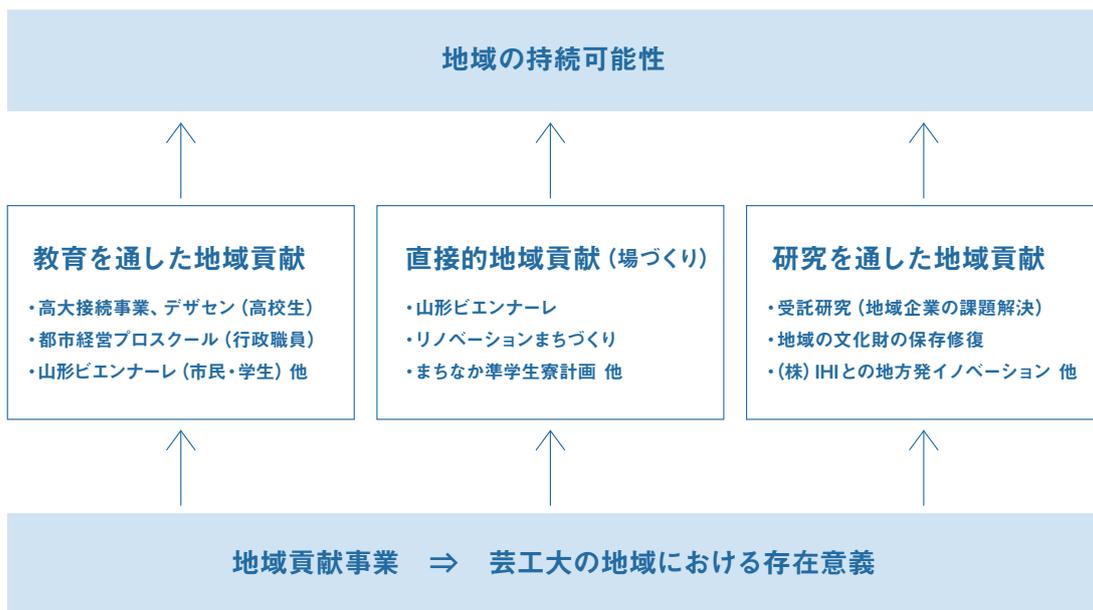
「地域の持続可能性^{※1}」に 貢献する大学①

芸工大は、多種多様な地域貢献事業を行っています。いずれの活動も、学生の学修機会をつくり、地域の持続可能性を目指したものであり、同時に地域における芸工大の存在意義を社会に問う活動でもあります。

一連の地域連携事業^{※2}によって地域社会が豊かになることで、芸工大が地域になくてはならない大学となるという、大学のビジョンを体現していきます。

※1 地域の持続可能性：人口減少社会にあっても、それぞれの地域において、地域経済が安定し、人々が快適で安心な暮らしを営んでいけるような持続可能な地域社会の形成が求められる（総務省）

※2 地域連携事業については別途、中期計画を策定



vision 2024

- ・山形市は、中心市街地に学生が住み、自ら地域活動に取り組むモデル都市となっている
- ・山形ビエンナーレは、地域芸術祭の成功例と称され、市民が誇りと思うイベントとして定着している

「地域の持続可能性」に 貢献する大学②

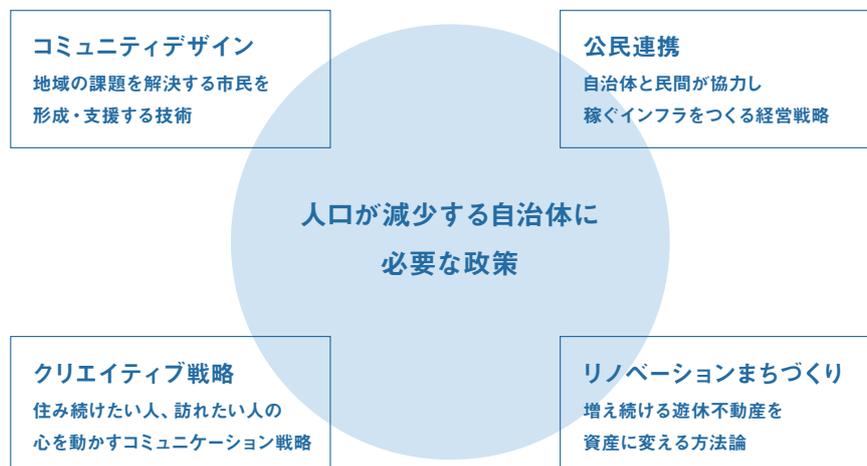
国の重要施策である地方創生は2020年から第2期に移り、地方自治体は具体的な戦略を立案・実行するフェーズに移行します。そうした中、芸工大には自治体の総合計画の具現化に関する相談も寄せられています。

その理由は、人口減・税収減の課題を抱える多くの自治体が求める、四つの地域課題解決のメソッドを芸工大が実装しているからです。(下記図参照)

この本学固有の強みをもって、地域の課題解決にコミットし、新しいローカルを創成します。

そして、これら地方自治体のニーズである大学のシーズを、学問として絶えずアップデートしていきます。

- ・「コミュニティデザイン」：コミュニティデザイン学科
- ・「公民連携」：都市経営プロフェSSIONALスクール(旧公民連携Pスクール)
- ・「リノベーションまちづくり」：建築・環境デザイン学科
- ・「クリエイティブ戦略」：グラフィックデザイン学科、企画構想学科、映像学科 他



vision 2024

芸工大が地方自治体のシンクタンク、クリエイティブディレクター
として機能し信頼を得ている

学修環境基盤整備と経営基盤の強化

これからの大学は、AI、IoTの発達で生まれる新しい授業形態、デジタル教材に柔軟に対応して学修環境を最適化していくことが求められます。

「創造活動のための最適なインフラ整備」を基本方針として掲げ、先進的な施設整備にアップデートしていきます。

大学の発展を持続可能にするため、大学を支える人づくり、教育改革を支える財務体質の強化を図ります。事務局組織で2019年に導入した新人事制度は、職員個人の成長が大学の成長につながるよう精度を高めていきます。また、職員が自ら新しいチャレンジを続けるため、デジタルレイバー（RPAなどソフトウェアのロボットを労働力とすること）を事務処理や調査分析の広範囲で活用し、生産性を高めていきます。

財政面では、教育改革を支える財政投資と規律ある財政運営を行い、財務体質を強化します。文部科学省の競争的補助金・科研費をはじめ、他省庁・機関の支援事業を研究し、幅広い外部資金の獲得に努めます。

地域が育てるこども園 「こども芸術大学」

3歳から5歳児とその母親の教育機関として創設されたこども芸大は、2017年に幼保連携型認定こども園となり、1、2歳の園児枠も設けて再スタートしました。2020年からは「子どもが育つ、大人も育つ、地域も育つ」を合言葉に新しいステージに踏み出します。

「乗り越えるのが少し難しそうながあった時、親のコトバだけではどうにもならなくても、先生のご指導により、我が子が自ら目標に向かっていく姿があり、達成することができた喜びを感じている」—これは、ある保護者の方のこども芸大に対する感想です。こども芸大の子どもたちは、好奇心旺盛で、何かしたい、ではどうするかを自分で考え、誰かとやってみて、「できる」という自信をもって卒園します。これは、幼児期に社会人基礎能力(アクション、シンキング、チームワーク)の芽を育んだとも言えます。こうしたことができるのは、子どもに主体性が生まれるよう、一人一人に問いかけて一緒に考える保育士がいるからです。これからも、こうした保育士を育成し、子どもたちに向き合います。人格形成期の子どもたちが多様な人格、才能と接する機会をつくりたいと思います。いずれは安心・安全を確保しながら「地域が育てるこども園」を目指しますが、まずは、大学生、教員、地域の母親OBから、始めたいと思います。母親の教育機関でもあったこども芸大は、大人の「こども観」、「子育て観」を変えてきたという自負があります。今後は、こども芸大を卒業していった母親を中心に、こども芸大の地域サポート体制を構築し地域に開かれた教育・保育のカたちをつくっていきます。こども芸大のアート、デザインを学ぶ大学生が側にいる環境は、子どもの好奇心に火を付け、想像力と創造力をかき立てます。これまで一部の学科の授業で行われてきた大学生と子どもたちとの連携の効果を検証した後、プログラムを全学的に広げていきます。

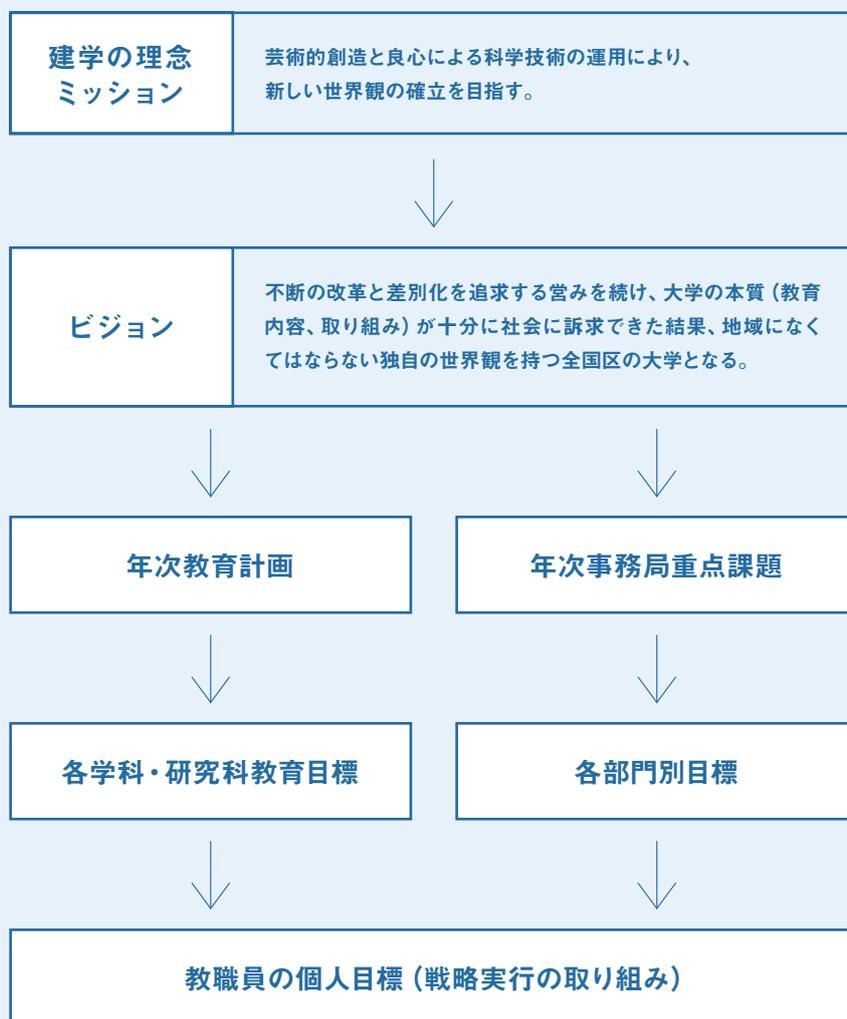
vision 2024

- ・こども芸術大学でしかできない保育・幼児教育メソッドを確立し、社会に発信している
- ・人格形成期の子どもたちが多様な人格、才能と接する機会が
つくりられている

「vision 2024」の推進方針

ビジョンを単年度の教育計画、事務局重点課題につなぎ、その目標から教職員の個人目標に落とし込むことで、「理念」から「戦術」まで一貫通するシステムとしていきます。

「vision 2024」立案の第一義は、教職員のベクトルを一致すること、全学一致をつくり出すことです。計画を戦略、個人の目標まで落とし込む過程を通して全学浸透を図り、実施することで成果に結び付けていきます。



学校法人東北芸術工科大学
vision 2024

発行日：2020年5月

編集：東北芸術工科大学企画広報課

発行：根岸吉太郎

学校法人東北芸術工科大学

〒990-9530

山形県山形市上桜田3-4-5

電話：03-627-2000（代）

FAX：023-627-2185

印刷・製本：田宮印刷株式会社

無断で本書の一部または全部を複写複製することは
著作権法上の例外を除き禁じられています。

©2020 TOHOKU UNIVERSITY OF ART & DESIGN

Printed in Japan



TOHOKU UNIVERSITY
OF ART & DESIGN